

「教える」を超える
—まおい学びのさと小学校のエスノグラフィー—

見城莉生

学ぶ、教える、学校、評価、教育

要旨

本研究の主たる研究設問は、「まおい学びのさと小学校における学習実践の中で、子ども達はどのようにして学習する主体として位置づけられているのか」である。

本研究を通して、学ぶことおよび教育という営みが文化的にいかに多様であり得るのかを示すとともに、現代社会で見えづらくなっている「学ぶ」こと自体を捉え直すことを目的とする。なお、本研究は特定の教育実践を理想化することを目的とするものではなく、教育という営みを文化的実践として相対化することを主眼とする。

本論文は、全6章から構成されている。

第1章では、本研究の出発点となった筆者の経験や問題意識を述べるとともに、研究設問と本論の構成を提示する。

第2章では、本研究の理論的枠組みを明確にするため、人類学ないし教育学の先行研究を整理する。学校教育を前提としないの学びのあり方を踏まえ、近代学校教育の制度が学習者に与える影響を示す。

第3章では、調査対象としたまおい学びのさと小学校（以下まおい小）の概要を示すとともに、本研究で用いた調査方法について述べる。また、筆者の立場性についても整理する。

第4章では、実際にエスノグラフィーを通して得られた事例をもとに、まおい小における日常的な教育実践を記述する。プロジェクト活動やミーティングでの活動の具体的な場面を取り上げ、「学ぶ」という行為がどのように構成されているのかを描写する。また、観察するだけではわかり得ないそれぞれの感情や意識について聞き取りを行った内容を記述する。

第5章では、第4章で取り上げた具体的な事例をもとに、その特徴的な教育実践は子ども達にどのような影響を与えているのか分析する。また子どもと大人の関係性が学びにいかなる影響を及ぼしうるのかに着目する。

第6章では、まおい小で子ども達がどのようにして学習の主体として位置付けられているのか論じる。またまおい小における子どもと大人の関係性や学びのあり方を筆者自身の言葉で定義する。最後に「教える」という行為そのものを問い直し、本研究の結論とする。